桃花源とユートピア

杉田英明＝編

東洋文庫
ふしぎの国

桃花源とユートピア

杉田英明＝編

平凡社

杉田英明　すぎた　ひであき

1956年東京生まれ。東京大学教養学部教養学科卒。東京大学教養学部助手。比較文学比較文化専攻。
論文「アラブ・ペルシア文学における浴場の壁画」「噴水とイスラム世界」ほか。訳書『オリエンタリズム』(平凡社，共監修)。

東洋文庫　ふしぎの国 5

桃花源とユートピア

1989年6月23日　初版第1刷発行

編　者　杉田英明
装　丁　奥村靫正
発行者　下中　弘
発行所　株式会社 平凡社
〒102 東京都千代田区三番町5
電話　03-265-0461(編集)
03-265-0455(営業)
振替　東京8-29639
印　刷　図書印刷株式会社
製　本　株式会社石津製本所
© Heibonsha Ltd. 1989 Printed in Japan
ISBN4-582-83705-0

乱丁・落丁本は直接読者サービス係でお取替え致します(送料小社負担)

平凡社東洋文庫は東京駒込の「東洋文庫」にも比すべき、宏大にして雑駁なるユーラシア文書館だ。主題（テーマ）と細部（ディテール）の面白さとにこだわりつつこれを読み返し纏め直せば、そこには意外な東洋再発見の愉しみが生まれてくる。これもまた新しい世界の読み解き方の一つに違いない。

――杉田英明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　桃源郷の系譜 ―― 5
第二章　山中神仙郷と隠れ里 ―― 39
第三章　海の彼方の楽土 ―― 97
第四章　イスラム世界の理想郷 ―― 135
第五章　西洋人の東方楽園イメージ ―― 171
第六章　桃源郷日本 ―― 193
解説　行きたい場所・帰りたい風景――桃源郷への道　杉田英明 ―― 215

第一章　桃源郷の系譜

桃花源

晋の太元年間に、武陵（湖南省）に魚を獲って暮らしを立てている男がいた。

ある日のこと、谷川ぞいにさかのぼって行くうちに、どれほど来たかわからなくなってしまった。すると、とつぜん目の前に桃の花の林が現われた。それは、川の両岸数百歩にわたって続いており、桃以外の木は一本もまじっていない。かぐわしい花は目もあやに咲き誇り、花びらがひらひらと風に舞っている。

漁夫は、世にもふしぎなことだと思い（漁夫の姓は黄、名は道真という）、さらに奥へと進んで、林がどこまで続いているか、見きわめようとした。すると、林の尽きたところは水源で、そこに一つの山がある。山には小さな洞穴があり、中はかすかに明るみがあるように見えた。そこで彼は舟を置き、穴の入口から中へはいって行った。

穴は最初は非常にせまく、やっと人ひとり通れるほどだったが、さらに数十歩進

むと、目の前がぱっと明るくなった。見ると、土地は平らにひらけ、家々が堂々と立ちならんでいる。手入れのゆきとどいた田、みごとな池、桑や竹のたぐいも見える。道は縦横にかよい、あちこちから鶏や犬の鳴き声が聞こえて来る。そこに見かける男も女も、身にまとっている着物は、世間一般の人といっこうに変っていない。白髪頭の老人も、おさげ髪の子供たちも、それぞれ、いとものんびりと、楽しげな様子である。

漁夫に気づいた村人はびっくりして、いったいどこからはいって来たのかとたずねた。ことの次第を答えると、村人は家まで連れ帰り、酒を出し、鶏をしめてふるまった。そのうちに、漁夫がまぎれこんだことを聞きつけた村人たちは、いっせいにやって来て、世間のようすをたずねるのだった。彼らの方では、

「わしらの祖先が、秦のころの戦乱を避けて、家族や在所のものを引き連れ、この人里はなれた土地にやって来たきり、外へ出ようとしなかったので、そのまま世間と縁を切ってしまったのだ」

と物語る。そして、

「いったい、今はなんという御代なのだ」

とたずねる。彼らは、漢なる時代があったことさえ知らないのだから、魏や晋に

いたっては、もちろん知るよしもない。そこで漁夫は、聞きおよんでいることを、いちいち話して聞かせると、村人たちは驚きのあまり、深い吐息をもらすばかりだった。そして、われもわれもと、漁夫を家に引っぱって行っては、酒食のもてなしをするのだった。かくして、漁夫は数日間をこの土地で過ごしてから、いとまごいをした。別れしなに、村人のひとりがこう言った。

「当地のことは、世間の人にお漏らしになるには及びませぬぞ」

さて、村を出ると、自分の舟が見つかった。そこで、もと来た道にそい、ところどころに目じるしをつけながら郡の町へ帰りついた。そして、太守に目通りし、一部始終を報告したところ、太守は、さらばと人を漁夫につけ、目じるしを頼りに道をたどらせたが、もはや行きつくことはできなかった。（『幽明録・遊仙窟』）

唐代桃源詩

桃源行

漁舟逐水愛山春
両岸桃花夾古津
坐看紅樹不知遠

桃源行

王　維

漁舟（ぎょしゅう）水を逐（お）い　山の春を愛す
両岸の桃花　古津（こしん）を　夾（さしはさ）む
坐（そぞ）ろに紅樹を看て遠きを知らず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行盡青溪忽値人（平声真韻）
山口潛行始隈隩
山開曠望旋平陸
遙看一處攢雲樹
近入千家散花竹
樵客初傳漢姓名
居人未改秦衣服（入声屋韻）
居人竝住武陵源
還從物外起田園
月明松下房櫳靜
日出雲中鷄犬喧（平声元韻）
驚聞俗客爭來集
競引還家問都邑
平明閭巷掃花開
薄暮漁樵乘水入（入声緝韻）

青渓を行き尽くして忽ち人に値う
山口より潜行すれば　始めは隈隩
山開けば曠望旋ち平陸
遥かに看る　一処　雲樹攢がるを
近づいて入れば　千家　花竹散ず
樵客　初めて伝う　漢の姓名
居人未だ改めず　秦の衣服
居人並に住む　武陵源
還物外に従って田園を起こす
月明らかにして　松下　房櫳静かに
日出でて　雲中　鷄犬喧し
俗客ありと驚き聞いて　争って来たり集まり
競い引いて家に還って都邑を問う
平明　閭巷　花を掃って開き
薄暮　漁樵　水に乗って入る

初因避地去人間
更問神仙遂不還
峽裏誰知有人事
世中遙望空雲山 平声刪韻
不疑靈境難聞見
塵心未盡思鄉縣
出洞無論隔山水
辭家終擬長遊衍
自謂經過舊不迷
安知峯壑今來變 去声霰韻
當時只記入山深
青谿幾度到雲林
春來遍是桃花水
不辨仙源何處尋 平声真韻

むかし或るひと漁舟に棹さし
山の春を賞しつつ谷をさかのぼり

初め地を避くるに因って人間を去り
更に神仙を問うて遂に還らず
峽裏誰か知らん　人事有るを
世中遙かに望めば　雲山空し
靈境の聞見し難きを疑わざるも
塵心未だ尽きずして鄉県を思う
洞を出でて山水を隔つるを論ずる無く
家を辞して終に長く遊衍せんと擬す
自ら謂う　経過旧迷わずと
安んぞ知らん　峰壑の今や変ぜるを
当時只記す　山に入ること深く
青谿幾度か雲林に到りしを
春来たれば遍く是れ桃花の水
仙源を弁ぜず　何処にか尋ねん

古い渡しにさしかかると
両岸に桃の花が今を盛りと咲いていた
うかうかと花に見とれて
だんだん遠くなるのも気づかず
清流の尽きるところまでくると
忽然(こつぜん)として異人に出逢った
舟を下りて山の洞をくぐって入ると
始めは道がせまかったが
進むにつれて山が開け眺めが広くなり
急に平地に出た
遥(はる)かに樹木がこんもり群がるところがあり
近づくと数多(あまた)の家々の間に花や竹が散在していた
迷いこんだ樵夫が漢朝の名を告げたが
村びとは始めて聞くようで
彼らはまだ秦朝の世の服装のままでいる
彼らは皆でこの武陵源に入って住み

人間世界の外にあって田園を開いたのだ
夜は月明るく松林を照らし
部屋の窓は静かに閉ざされ
日が出ると白雲かかる間に鶏犬の声が聞こえる
村びとは俗界の人が来たと聞いて驚いて皆集まり
争って家に案内して世間の様子をたずねた
夜が明けると落花を掃(はら)いて閭巷(むらざと)の門を開き
日が暮れると漁父樵夫(すなどりきこり)が水路に沿って帰ってくる
彼らは初め秦の乱をさけて人の世をのがれてきたが
ここに来てさらに神仙の生活を求めて還るを忘れた
この山かげに人が住んでいようとは誰が知ろう
世間の人は遥かに雲かかる山を眺めるばかりだ
客はかかる霊地の世にあり難(がた)きを知りながら
俗心なお尽きぬままに故郷のこと忘れがたく
別れて洞穴を出てくるとき
いかに山水を隔てても

必ずついに家を出て
再びここに来て楽しく暮らすつもりだった
もと来た道を迷うこともあるまいと思ったのだが
豈計らんや今来て見れば
山壑の様子は変わってしまい
当時山深く入り　いく度か谷を渡り
雲かかる林に到ったことを憶えているばかり
春来れば桃花の水はどこにも溢って
仙境はどこにあるやらついに分からなかった（『唐詩三百首』）

桃花谿　　桃花谿　　張旭

隱隱飛橋隔野烟　　隱隱たる飛橋　野烟を隔つ
石磯西畔問漁船　　石磯　西畔　漁船に問う
桃花盡日隨流水　　桃花　尽日　流水に随う
洞在清溪何處邊（平声先韻）　　洞は清溪の何処の辺にか在らん
とおく霞んだ虹の橋

磧の畔で漁父に問う
ひねもす流れる桃の花
仙人の住む洞穴は
渓のどこらにあるのだろう（『唐詩三百首』）

【解説】 うららかな春の日、虹のような美しい橋が霞をへだてて向うにかかっている。河原の西辺で釣する漁師にきいてみた。桃の花は終日流れているが、この水を遡って、桃花源へ入る洞穴はどこにあるのだろうと。すべて陶淵明の「桃花源記」をふまえる。

送崔九　　崔九を送る　　裴迪

歸山深淺去　　山に帰り深浅に去る
須盡邱壑美　　須らく丘壑の美を尽くすべし
莫學武陵人　　学ぶこと莫れ　武陵の人の
暫遊桃源裏（上声紙韻）　　暫く桃源の裏に遊べるを

山に帰って
山のあちこち
分け入ろうとする君よ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com